市民句会報

令和三年一月二十七日　オーテピア高知図書館（高知市民図書館）　○印　味元昭次選　順不同

富江

○育児書に羽子板写真貼りし日よ
寒稽古竹刀打ち合う豆剣士
日時計の刻指す影は寒の昼

美貴

○独り居の余白ばかりの寒さかな
哀しけりや啼けよと一声寒鴉
スクランブルエッグふはふは寒卵

弘

○十分に老いて噎せおり寒の水
寒灯のひとつに帰るあたたかし
二ン月やピタゴラスイッチ転げだす

丞子

○寒梅や大正生まれの母の顔
○家路へと寒夕焼の橋渡り
天風（てんぷう）や南国土佐に寒波来る

郁子

○寒月や細きヒールの音高し
寒風を捉え洋上鳶の舞
塵置場ずるい番人寒鴉

えり

樋（とい）の水歌うて走り里寒（さと）し
冬銀河奥土佐白く洗ひをり
蝋梅の蜜酒飲むや鳥数羽

夕子

○こころもちマスクの下の寒の紅
自粛にも飽きて真紅の寒の紅
寒の水何はさておき手を洗ふ

さえ

庭前の雪駄に止まり春の鳥
長靴の狭き土間なり冬の鍋
初鍋の宿に自慢の桧風呂

富子

○睦月なれど集えぬ世にて紅をひく
蠟梅（ろうばい）に全て託して後は黙（もだ）
寒紅やこころ作っていざゆかん

千代

○待春や色鉛筆を尖らせて
○寒星や形見の手編みカーディガン
○切株の百の年輪寒月光

樹

○寒雲や冷蔵庫の中は空

文子

○牡蠣数多鳴無（おとなし）神社船着き場
寒の薔薇蕾のままの日を重ね
お正月帰っていいかと子は聞けり

農子

甲高い声の響や寒稽古
寒禽やもっと緩りと鳴き渡り
知らぬ間に新築の家寒椿

味元　昭次　作品

二度鳴くは明日のために寒鴉
三寒の菅氏四温の池江璃花子
寒卵置き残生を噛み締むる